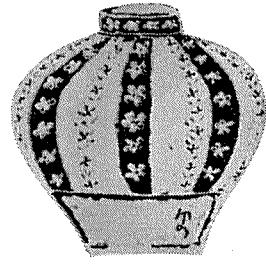


海老名弾正

住谷悦治

明治が大正に代った年に、わたくしの家庭でも、わたしの兄と姉とがつづげざまに死んでしまったので、中学生であつたわたくしはとても悲しい思いに沈んでいた。一級上に徳江淳之助さんという後に同志社へ這入つた先輩が、わたくしを前橋教会へ伴れて行つてくれた。牧師は野口末彦先生というおだやかな先生であつた。翌大正二年のいつだつたかの日曜礼拝のとき、はじめて海老名先生の説教を聞いた。あの濃い長髯ながひげを震わせつつ、冴えわたつた声で美しいジュスチニアをもつてする先生の説教に会堂の人々は酔えるもののごとく片唾をのみつつ聴き入つていた。少年のわたくしは、講壇上の先生に何かしら予言者のな、神々しい威圧を感じ、すっかりその雄



同志社人物誌

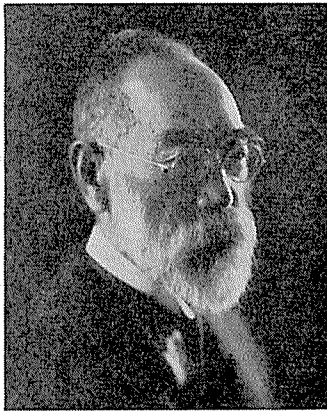
(1)

弁に動揺してしまつた。

五十年も昔のこと、説教の本筋は少しも覚えていないが、何でも西南戦争のとき、熊本城の天守閣が焼けおちたときの、その物凄く壯絶極まる光景の、生々しい描写がまことに印象的であつた。いよいよ高い天主閣が真紅な炎につつまれて崩れおちるその瞬間、熊本城下街の何千の老若男女が、思わずワーツと悲壮な叫び声を挙げたというその光景を、眼に見るように語られた。力強い両手のジュスチニアとともに、その城下街のワーツという叫び声が先生によつて再現されたとき、ほんとうにわたくしは息の根がとまる思いがした。それと何の連絡があつたのか覚えていないが、「花岡山」のバンドの話が印象的であ

つた。日本語を絶対に使わなかつたというエピソードという先生の話、横井(伊勢)時雄や金森通倫がキリスト教を信じたためにひどい迫害に逢つた話、熊本洋学校とか暗殺されたという横井小楠とかいう名前。みんな明治初年のキリスト教徒の殉教者のな、何か神秘的な物語がわけもなく魅力的であつた。先生自身も、キリスト教を信じたために、時に白刃の下をくぐつた明治初期の「志士のクリスチャン」の一人であつたこともはじめてそのときに知つて胸をとどろかしたのであつた。これが海老名先生にたいするわたくしのファースト・イムプレッションとして、いまだに濃く脳裡に刻みつけられているわけである。

中学を卒業して仙台の高等学校生活を終えて東京で大学生の生活をはじめたとき、海老名先生は本郷教会の牧師として、その雄弁と名説教で大学生や知識人層を惹きつけていた。比屋根安定氏は、海老名先生が横井小楠をもつて自ら任じており、一種の日本のキリスト教を唱えて、本郷教会は東都学生たちの一度は詣でねばならぬ聖所ホリトコロになつていて、と評している。(「教会三十五人像」四七頁)。そして先生は「説教の準備を多少したに違い



海老名先生

ないが、聖書の註釈に囚われず、神学上のつまびらかな議論に走らず、だいたいの題目さえ掴んでおれば勇躍して講壇に上り、堂々と長広舌を振った。一枚の原稿をも携えずに、会堂に溢れる聴衆の顔さえ見ると、横井小楠の詩句のように「神智靈覺湧如泉」、話材相次いで一時間を越えても、聴衆は一人として身動きもせず、傾聴して倦まなかった。」(同、四八頁)と言っている。まさに天成の雄弁家であり名説教育家であったといえようか。「日露戦争前後における本郷教会の盛況は、実に大したものであった。満堂立錫の余地なく、講壇の上まで登り、海老名の足もとにまで詰めかけていた。後の東大教授・デモク

ラシイの提唱者吉野作造、早大教授・代議士内ヶ崎作三郎、神秘思想家肌の代議士・「久遠の基督教」の著者小山東助(堀浦)、労働運動の先鋒・和製サミエル・ゴンパースこと鈴木文治、これらは東大学生時代であつて、ライオン歯みがきの初代小林富次郎、塗物組合(〇〇)の荒木真弓は幹事であり、今の主婦の友會長石川武美は、海老名主筆の『新人』の編集を手伝っていた。時代は、日本が新興しつつある途上であつたから……」(同、四七頁)本郷教会は新しい時代のインテリゲンチアのメッカとなつたといふのである。

わたくしが東京で学生生活を始めたのは大正八年の秋からであるが、海老名先生は間もなく同志社総長に推されて東京を去つて京都へ行ってしまわれた。ところが、まったく思ひかけぬ奇縁ともいふのであろうか、大学卒業間近になつて、大学の教授吉野作造先生が、同志社大学の法学部で経済学史専攻の助手を一人欲しいと言つてきているが、行く気があるか、との話である。吉野先生は本郷教会関係であり、東大Y・M・C・Aの理事長であり、そのような関係から海老名先生の総長就任とともに人事について何かと相談を受けている

のであつた。わたくしは、このようなことから計らずも海老名総長のもとに大正十一年から教員としてつとめることになつたわけであるが、四月京都にやつてきて間もなく、海老名総長宅にわたくしら新婚夫妻と、やはり新任の能勢克男氏と先輩の経済史専攻石田秀一郎氏夫妻とが夕食に招待された。そのころは同志社大学も昇格したばかりで学生も教師も少数であつたから新任の教師は総長に一度は招待されたらしい。中学時代から仰ぎみた神々しいような海老名先生にこのときはじめて直接にお話を伺つたわけであるが、その印象はまことに物やさしいおだやかなお父様という感じであつた。夫人みや子女史は横井小楠の息女であり、横井時雄の令妹として、打てば響くような牙えをみせた女丈夫であつた。その昔、海老名先生たち、熊本バンドの人々に交つて東京から京都まで東海道を歩き通したという勇ましい回顧談や熊本青年たちが、可愛い少年の向うから近寄つてくるのを見て、歓喜して大地にさつと逆立をするという珍らしい話など伺つた。その後、同志社教師生活をつづけるに従つて、同志社内にも校友にも、わたくしなどより、遙かに、もつと海

老名先生に近い親しい人々が如何に多いかということを知るようになり、とても自分など先生から遠い存在のものであることがわかった。したがって、わたくしは同志社では一平教員として、時たま先生の講演や説教を聴くだけで、遠くから先生を眺めるようになった。

先生が大正九年に本郷教会から同志社総長に就任されて、昭和四年に、有終館火災事件に責を負われて、総長を辞任される前後、ことに能勢克男、高橋貞三、高橋信司諸氏と学生の西浩吉、相沢清吾の諸君と「同志社新聞」の活潑なうごきと、その渦巻きの上に高く立たれていた大海老名総長の姿を忘れることはできない。

いよいよ先生が京都を去られる時、京都駅の広いプラットフォームで、先生に別れを惜しむ数百のうづくまっつて涙を抑えている学生達にむかつて、先生はまさに最後の大雄弁を振られた。それは言々句々同志社の将来の正しい発展を期待する涙の熱弁であった。わたくしの聴いた先生の講演や説教の数々のうちで、この京都駅プラットフォームにおける雄弁に勝る雄弁、あの熱弁に勝る熱弁を聴い

たことはなかった。見送りに行った教師も学生も事務関係の人々もみな涙を抑えて聴いていた。低くうづくまる学生たちのあちこちに嗚咽に肩のふるえるさまが見られた。いまだかつてわたくしはこのような感激的な光景に逢ったことはない。海老名先生にたいするどのような批判が将来に現われようとも、わたくしはあの京都駅プラットフォームの同志社師弟の清純・壮美な姿に深く頭を垂れるものである。まことにそれは海老名先生の人徳のしからしめるところである。

先生は、安政三年（一八五六）に筑後国水のふるさと柳川に生れた。熊本洋学校に入つて、ジエーンズの感化によってキリスト教徒となった。明治九年のいわゆる「熊本バンド」の花岡山における奉教の誓いに加つた年少者である。同志社に転学したこれら青少年キリスト教徒こそ新島先生の下に、同志社の今日の盛況への基礎を築いたといえよう。先生は明治十二年同志社第一回の卒業生として、金森通倫、小崎弘道、宮川経輝、森田久万人、浮田和民、市原盛宏、山崎為徳、横井時雄、和田正脩、下村孝太郎、不破唯次郎、岡田松生、吉田作弥とともに、同志社の輝け

る大先輩であるが、日本のキリスト教界における第一流の大先輩であることはいうまでもない。同志社を卒業してから、新島先生の旧藩、上州安中に赴き、ここを中心に近在の伝道に従い、草鞋ばきで、くりかえしくりかえし、説教して歩いた。明治十九年東京で本郷彦岐坂下で伝道し、二十年には熊本英学校、大江女学校を創立し、二十三年には組合教会の日本伝道会社長に推挙された。二十六年に神戸教会の牧師となったが、三十年に上京して本郷教会を再興し、天下にその存在を認められ、キリスト教主義の評論雑誌として「新人」を発刊し、吉野作造博士その他と毎月その椽大の筆を揮つてキリスト教界のみでなく、一般社会の新時代の知識人の注目を惹くにいたつた。大正三年の世界大戦以後、時代の社会思想やデモクラシーの風潮とともに、多くの学生、青年男女に感化を及ぼした。同志社総長に推挙されたのは、その文筆と伝道のさ中であつたし、総長という重責に就任するについてはそうそう気軽に引き受けられなかつた経緯をきいている。

大正九年四月十六日に同志社では総長就任式が行われた。理事綱島佳吉が海老名先生の

紹介の任に当つたが、それによると先生は「日本の宗教界・思想界における偉功と、その学識ならびに徳望・人格は同志社総長として最も適任者である」といい、同志社の歴史とその使命を説き、天父の祝福が、この優れた総長のもとに教職員、学友、生徒のあるよう、総長と一体になって同志社の発展に力をつくすように希望したのであった。海老名先生は、この時、就任の辞として、創立者新島先生の主張に準拠して、同志社の人格教育が社会に重要視されてきたこと、同志社学生の自治主義に立った歴史的事実と、将来ますます国際的精神を高調し發揮すべきこと、さらに男女卒業主義を尊重すべきことを説いた。そして、これら新島先生の意志をついで、将来の教育における新天地を開拓して行かねばならぬことを強調した。

海老名先生のキリスト教を評する人は、それが日本のキリスト教であるという。それは恐らく、キリスト教徒が世界同胞主義を主張したことにたいし、海老名先生は、その主張とともに「初代クリスチャンは真に愛国の士であると論じ、また「大志をもつた初代クリスチャンは愛国心をもつていた」という言葉

じりを捉えてのことかも知れぬ(海老名弾正講演「日本の倫理宗教思想及び国民生活に及ぼせる基督教の感化」、キリスト教の世界主義・世界人類同胞主義と愛国心や真の愛国が何ら矛盾するわけのものではないのに、とくに「日本的」というにはあたらなと思われる。先生の説く「愛国」も「愛国」も、何ら世界人類同胞主義とは矛盾することなく、ごく素直に思想的体系をなしているといえるのである。それから先生は、初期キリスト教徒のある共通点としての「志士のクリスチャン」であるといわれている。キリスト教を信じたために白刃の下をくぐらねばならなかつたし、井上哲次郎や加藤弘之一派や国粹主義者と論争してキリスト教を擁護し主張し闡明しなければならなかつた初期キリスト教徒は志士の・武士的教養を身につけていたことは事実であろう。しかし先生は同時に「新しい時代の人格」を身につけておられた。新しい人格という意味は、先生がイエスをもつて「新人」であると論じたことによる。先生は日本の武士道は偉いが、しかし、武士道ではとうい新時代をつくることはできない、封建時代や明治時代と、新時代(現代)大正・

昭和時代)とは、「その基礎が違うのだ」(「新人イエス」と論じている。人格そのものの時代的新しき―新しい時代に、新しい人格やエトス論を堂々と論じていることは、まことに卓見であり、ペテロがイエスに向つて「あなたはキリストだ、活ける神の子だ」と言った言葉を挙げて、海老名先生は、その真意はイエスが「新しい人格」として、「新人」であることを論じているのであるが、先生ご自身が、実は、「志士のクリスチャン」と評されつつ、「即新時代の新人」として生き、古きものを実践において否定して、「即新時代的」のものへの精進を身をもってあつづけてきたクリスト教徒であつたといえる。それは先生に直接接近した人々の実感であつて、単なる議論を超えている体験である。先生は昭和十二年(一九三七)に年八十歳で逝去されたが、わたくしはそのころ、すでに同志社を離れ、四国の僻地でうごきもとれないその日その日を生きていた。先生の「基督教十講」や「帝国の新生命」やいくたの講演・速記「新人」誌上の論文も貴重ではあるが、先生という人格的存在は、さらに貴重なものであると痛感したものである。(経済学部教授)